

ライフステージによる生活リズムの変化 子育て家族の住まい方調査(1)

生活時間 育児期 ライフステージ
家事協力

正会員 ○古賀 繭子 *1
同 添田 昌志 *2
同 松本 吉彦 *3
同 伊藤 香織 *3

1. 調査の目的

生活時間に関しては過去多くの調査研究があるが、深夜営業が一般化した近年の子育て期の家族の住生活に関するものは少ない。本研究は平日における家族の帰宅→夕食→就寝の生活リズムの実態を把握し、そのライフステージによる変化を考察することで長期に渡り住み続けられる住まいの設計に活かすことを目的とする。

2. 調査の対象

ハウスメーカーA社の建設した注文住宅の居住者を対象にメールを送付し、アンケートサイト画面で回答を依頼した。本報ではライフステージによる生活時間の変化を明らかにするため、全回答者 924 名のうち、夫の就業形態(フルタイム勤務・リタイア)と年代、同居の子の有無および学齢(幼児期・学齢期・独立期)に着目し、表1に示す世帯を抽出した。これらの世帯はいずれも専業主婦世帯(パート含む)、かつ、親同居がない世帯である。以降では、幼児期、学齢期の子どもを持つ子育て期の家族を中心に、子の成長と夫の就業形態の変化による影響について検証する。

表1: 調査対象の概要

調査方法: 戸建て注文住宅居住者に対する Web アンケート 調査時期: 2008年3月 調査エリア: 関東~東海~関西~山陽~北九州の各都府県					
夫の就業形態	妻の就業形態	夫の年代	末子の学齢	学齢の詳細	N
フルタイム	専業主婦・パート	~49才	夫婦のみ	同居子なし	27
			幼児期	未就学幼児	120
			学齢期	小学生~高校生	81
		50才~	独立期	大学社会人等	67
リタイア(=無職)	リタイア(=無職)		独立期	大学社会人等	50
			夫婦のみ	同居子なし	115

3. 家族の帰宅時間

夫の帰宅時間は、子が幼児期に最も遅くなり、21時以降に帰宅することがある割合が5割を超えるが、子が成長するにつれ早くなる傾向にある(図1)。

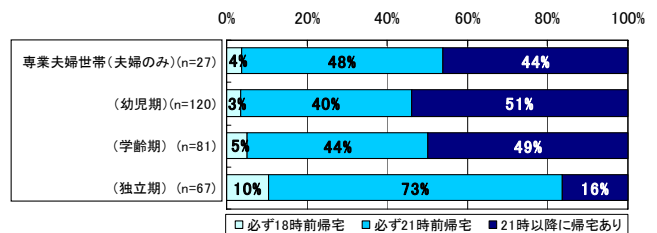
子の帰宅時間は、幼児期と学齢期で大きな差があり、幼児期では大半が18時より前に帰宅しているが、学齢期では21時以降の帰宅が多くなる(図2)。学齢期の子がい

る世帯の87%が塾通いや習い事をしていると回答しており、その影響と考えられる。そのため、学齢期の子のいる世帯の約半数は定期的に家族の送迎を行っており、他の世帯に比べ高い割合になっている(図3)。

4. 夕食時間

夕食時間について見ると、幼児期の子がいる世帯では19時前にとる割合が8割近くになっており、幼児期に夕食が早まることがわかる。その一方で、上述したように幼児期の夫の帰宅時間は遅いため、夕食は分散して取られる傾向にあり、8割を超えている(図4)。

学齢期、独立期と子が成長するにつれ、夕食が19時前、21時以降の割合は共に下がっていくが、夕食を分散して取る割合はそれほど変化がない。これは子の帰宅時間が遅くなり、子が別に夕食を取るためと考えられる。



※ 帰宅時間は午後12時以降を3時間毎に区分した選択肢から、帰宅することのある時間帯を複数回答で尋ねたものであり、その選択パターンから必ず18時前帰宅、必ず21時前帰宅、21時以降帰宅ありの3つに分類した。

図1: 夫の帰宅時間

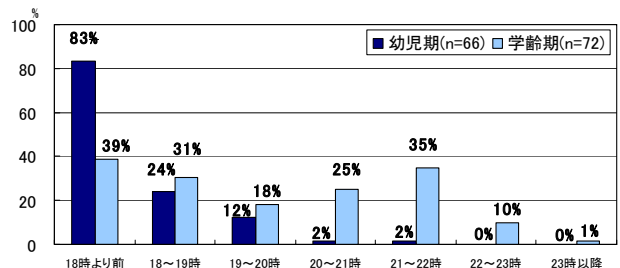


図2: 子の帰宅時間分布(複数回答)

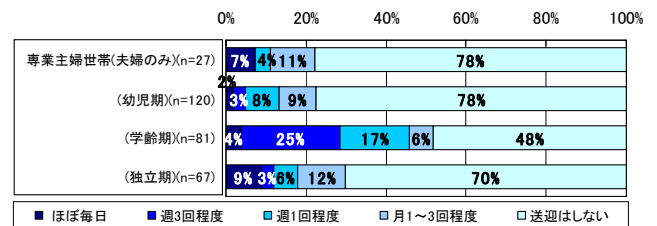


図3: 家族の送迎頻度

リタイア世帯では、19 時前に夕食をとる人の割合が一転して高くなる。特に、子のいない世帯では 7 割近くが 19 時前で、21 時以降の夕食は大幅に減り、ほとんどの世帯が夕食を家族（夫婦）一緒にとっている。

5. 夕食分散時の LDK での住生活

上述したように、子育て期には夕食を分散してとる割合が高いが、夕食が分散した場合でも、「ほとんどいる」「時々いる」を合わせ 8 割以上の家族が LDK に一緒に居る（図 5）。具体的な LDK での行為を尋ねると、TV や読書といった団らんに関するもの以外にも、家事や書き物、仕事など多様な行為が、子どもの年代に関わらず行われている。中でも学齢期では半数近くが LDK で子が勉強や宿題をしていることが特徴的であり（図 6）、自由回答の例に見るように、LDK では家族のそれぞれが多様な行為を行いながら一緒に過ごしている実態が示された。

6. 夫婦の就寝時間

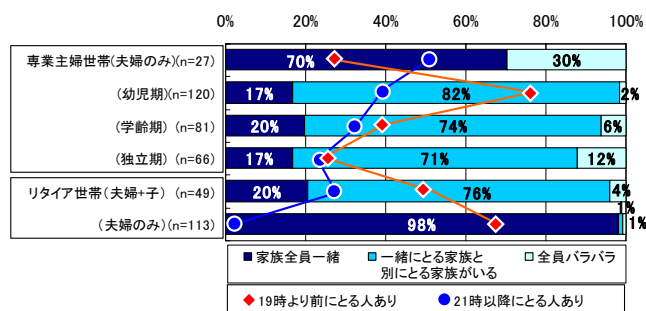
妻の就寝時間は、幼児期の子がいる場合に際立って早くなり、23 時までには就寝する割合が 6 割近くになる。一方、幼児期には夫の就寝時間もやや早くなる傾向にあるが、妻ほどの変化はなく、そのため、幼児期の子がいる世帯では妻の方が早く寝る割合が高く、5 割近くになっている（図 7）。

夫、妻とも年齢が上がるにつれ、早く就寝する傾向が強まり、リタイア世帯の夫は半数以上が 23 時までには就寝しており、夫の方が早く就寝する割合が高くなる。

7. まとめ

- 1) 幼児期には、夫婦のみの世帯と比べ、子に生活リズムを合わせて夕食時間、就寝時間が早まる。夫の帰宅は逆に遅くなるため、夕食、就寝時間は分散する。
- 2) 学齢期には、子の帰宅時間が遅くなり夕食の分散傾向は変わらない。しかし夕食が分散した場合でも、家族はそれぞれに多様な行為をしながら一緒に LDK で過ごしている。
- 3) 独立期では、夫の帰宅、就寝は早まり、21 時以降の夕食も減少するが、夕食の分散傾向は続き、子との生活リズムのずれと考えられる。
- 4) リタイア期では、夕食、就寝といった生活時間全体が早まるが、子がいる場合は独立期と同様に夕食の分散傾向が続く。夫婦のみになると夕食はほとんど一緒になるが就寝時間が一緒なのは 6 割に留まる。

以上、本報では、ライフステージによって生活時間が変化している実態を明らかにすることができた。



※夕食時間は 19 時前、19～21 時、21～23 時、23 時以降の 4 つの選択肢から、主に夕食をとる時間帯を複数回答で尋ねたものであり、その選択パターンから、19 時より前にとる人あり、21 時以降にとる人ありに分類した。

※夕食の形態は、その他の回答を除いて集計

図 4：夕食の分散状態

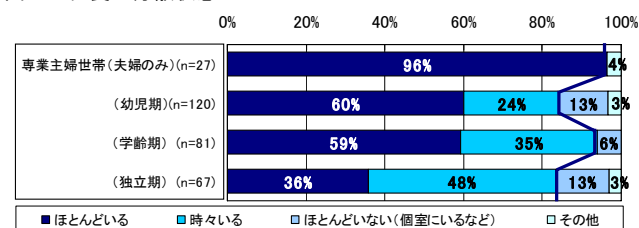


図 5：夕食分散時に LDK に家族が居るか（専業主婦世帯）

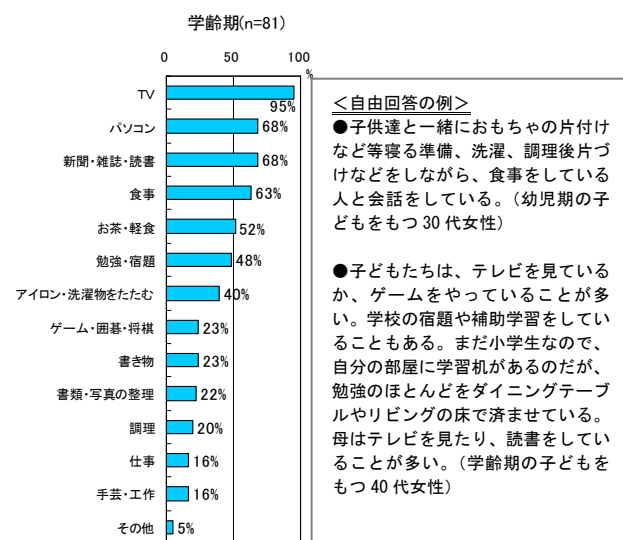
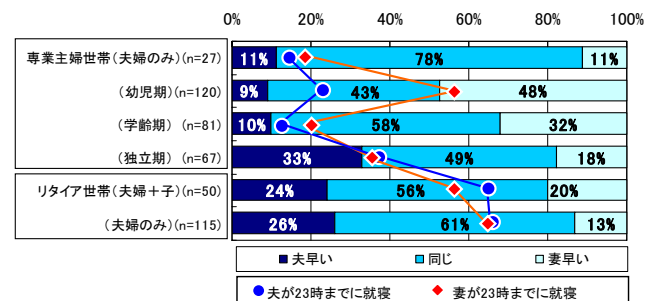


図 6：21 時以降 LDK の過ごし方



※就寝時間は 21 時以降 1 時間毎の 6 つの選択肢から、就寝することが多い時間帯を 1 つ回答させた。夫婦の回答を比較し、就寝時間のずれ（夫が早い、同じ、妻が早い）を判定した。

図 7：就寝時間の分散

* 1 ㈱環境計画研究所
 * 2 LLP 人間環境デザイン研究所
 * 3 旭化成ホームズ 共働き家族研究所

* 1 Environmental Planning Laboratory inc.
 * 2 LLP Human Environment Design Laboratory
 * 3 Asahikasei Homes Co. DEWKS Laboratory